

2021.7.18説教  
聖霊降臨後第8主日

「求めている」

マルコ6章30-34、53-56

◆五千人に食べ物を与える

6:30 さて、使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した。

6:31 イエスは、「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」と言われた。出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである。

6:32 そこで、一同は舟に乗って、自分たちだけで人里離れた所へ行った。

6:33 ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見て、それと気づき、すべての町からそこへ一斉に駆けつけ、彼らより先に着いた。

6:34 イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。

◆ゲネサレトで病人をいやす

6:53 こうして、一行は湖を渡り、ゲネサレトという土地に着いて舟をつないだ。

6:54 一行が舟から上がると、すぐに人々はイエスと知って、

6:55 その地方をくまなく走り回り、どこでもイエスがおられると聞けば、そこへ病人を床に乗せて運び始めた。

6:56 村でも町でも里でも、イエスが入って行かれると、病人を  
広場に置き、せめてその服のすそにでも触れさせてほしいと  
願った。触れた者は皆いやされた。

私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とがあなたがたにあるように。

本日与えられました御言葉は、マルコによる福音書6章30節から始まります。

これは「五千人分の食事を賄う」話の導入部分にあたりますが、与えられた聖書箇所では、五千人での食事の本題には入らず、53節の「その出来事の後」の箇所にまで飛んでいます。

つまり、本日の礼拝では、「五千人での食事の前と後」を読むこととなりますし、そこを読むようにと定められています。

実は、聖書日課の流れを見ますと、本日も含めて4回の礼拝にわたり、「パン」に関わる話が続くこととなります。

しかも、今週の「五千人での食事」の導入部分はマルコ福音書から読むにも関わらず、次週の「食事を賄う」本題からは、ヨハネ福音書の視点に沿って読むことになっています。

「パン」をテーマとして続く聖書日課の流れについて、導入部である本日、少しご紹介しておきます。

7/18は、マルコ福音書 6章30-34、53-56節、  
ここは本日の導入部ではありますが、イエス様一行がどこへ行っても群衆が押し寄せること、そして病人の癒しを求めている姿から、「求めること」を考えます。

7/25は、ヨハネ福音書6章1-21節、  
ここでは、五千人の食事を弟子たちが賄う姿を通して、「分け合

うこと」を取り上げます。最近、教会員との対話の中で、「キリストを分け合うとは、どういうことですか？」との話題がありましたので、このことも考えたいことです。

8/1は、ヨハネ福音書15章9-12節、  
ここは直接的なパンの話ではありませんが、神の愛に留まることによって人は喜びで満たされるというイエス様の約束を通して、「向き合うこと」を考えます。

8/8は、ヨハネ福音書6章35、41-51節、  
ここでは、神からのパンについて語られています。イエス様による、「わたしは命のパンである」との御言葉から聴いてまいります。

このように、これから4回、聖書の語る「パン」について聴き、考えてまいります。

さて、本日の御言葉は、マルコ6章30節から始まります。

「さて、使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した。」

とあります。

6章7節で、イエス様によって弟子たちは二人ずつ組みとされ、ミニ伝道旅行に派遣された成果が報告されています。弟子たちはイエス様が教えられた通り、杖一本だけを持ち、サンダルを履いて旅をして来たのです。

彼らが訪れた先では、神の国が近づいたこと、悔い改めて福音を信じること、そして、幾人かの病人の癒しが与えられたことで

しょう。

旅の困難と、受け入れた人々の優しさや信仰の芽生え、二人で組となったことの励ましや喜びが分かち合われたことでしょう。

31節、イエス様は弟子たちをねぎらい、「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」と勧めておられます。

「あなたがただけで」とありますが、少し読み進めますと、「弟子たちだけで」というほどのことではなく、「人々から離れて」ということで、ここでは、イエス様も弟子たちと共に舟で同行されておられます。

33節を見ますと、イエス様一行が行く所はどこへでも群衆が先回りしており、もはやイエス様たちが隠れる所も休む所もない状態がうかがえます。

34節は、そのような群衆の様子を見て、イエス様は「飼い主のいない羊のような有様」として受け止め、「深く憐れみ」、教え始めておられます。

「教え」というのですから、単にお話しをされただけではなくて、相手への「語りかけ」を通して、その人が分かるまで「寄り添う」ことであつたでしょう。

また、「深く憐れむ」という言葉でイエス様の思いが伝えられていますが、この「深く憐れむ」とは「内臓」と「引きちぎる」という言葉が合わされた言葉です。日本語で言うところの「断腸の思い」であり、イエス様の十字架を偲ばせる「身を割く」ということと同じです。

ここまでが、「五千人の食事を賄う」出来事の直前の様子でありました。

次に、53節以下にあります「事後」の様子を見てみますと、「事前」と同様、群衆は「イエス様だ！」と知ると、55節、「その地方をくまなく走り回り、どこでもイエスがおられると聞けば、そこへ病人を床に乗せて運び始めた」とあります。

憐れむべき状態の群衆が、後を絶つことなくイエス様の行く所へと追隨しています。

特に、人々がイエス様の元へと病人を「戸板に乗せて」（床）運び回る様子は、人々の病人への憐れみが伝わってきます。

病人を床に乗せて連れて来る様子については、マルコ2章のエピソードでは、家の屋根をはがしてイエス様の前へ連れて来るほどの人々の勢いが描かれています。

本日、注目しますのは最後の56節です。

「村でも町でも里でも、イエスが入って行かれると、病人を広場に置き、せめてその服のすそにでも触れさせてほしいと願った。触れた者は皆いやされた」

「村でも町でも里でも」という表現は、2000年前のパレスチナを想像しますと、どこも同じような所に思えて、ギリシャ語原文を見てみますと、「村でも都市でも野原でも」というイメージでありました。「山上での説教」を思わせます。

ここでも、人々の病人への思いやりが描かれています。やはり病人を戸板に乗せて、連れてきています。

「イエス様、病人に触れてください」ということまでは求めておらず、ただ「お通りになるときには、イエス様の衣のすそにだけでも触れさせてください」との、遠慮がちにも強い確信を持った態度が印象的です。

ここには、癒しを「求めている」人々の姿がはっきりと記録されています。

人々はイエス様を、「求めている」のです。

人々はイエス様に、「求めている」のです。

このことは、現代に生きるクリスチャンも同様です。

私たちはイエス様を、「求めている」。

そして、イエス様に、「求めている」のです。

イエス様の「服のすそに触れる」という癒しへの期待と行為は、先日お読みしました、マルコ5章25節以下に記されている「12年間、出血の止まらない女性」と出遭う出来事において、28節で、「この方の服にでも触れればいやしていただける」との確信と希望をいただいていた女性を思い起こさせます。

この女性は、イエス様の服に触れたことにより癒されました。さらに、イエス様に呼び出され、公衆の面前で病気の完治が告知され、人の中で、人と共に生きる人生が回復されました。

「服に触れて癒される」という、別のエピソードをご紹介しますと、使徒言行録19章11節以下のところで、

「神は、パウロの手を通して目覚ましい奇跡を行われた。彼が身に着けていた手ぬぐいや前掛けを持って行って病人に当てると、病気はいやされ、悪霊どもも出て行くほどであった。」とあります。

イエス様ご自身の「衣」どころか、伝道者にすぎないパウロの「手ぬぐい」や「前掛け」でさえ、病人を癒し、ここでは「悪霊を祓う」出来事として描かれています。

これらの「癒し」の様子を、3つの視点から考えます。

1つ目は、人々が「求めていること」から。

信仰に限らず、人生は求めなければ、与えられないものでありましょか？

ある人が求める力を持っていなかったとしても、友人たちが病人を戸板に乗せてイエス様の元へと駆けつけた姿を通して、「執り成すこと」もまた「求めること」であることを知らされます。「私」の信仰は、同時に「私たち」の信仰であると教えられます。

また、たとえ「癒し」に至らなかったとしても、求めるという気持ちは希望をいだく人にしか起こりませんから、求めるという行為そのものに、すでに希望が起こされている、引き出されているという「奇跡」にも匹敵する出来事を素晴らしいと感じます。

2つ目は、「服のすそにでも触れれば」という出来事から。

イエス様の衣、パウロの手ぬぐいや前掛けという「物」に、病気を癒す力があつたのでしょうか？ と問うまでもありません。



「物」に不思議な力などありません。

では、このような現象は、なぜ起こったのでしょうか。

人々が求めたからでしょうか？

そうですね。求める人がいて、与える神がおられたのです。

3つ目は、「与える神がおられる」ということから。

聖書に描かれている「病気の癒し」は、自然治癒や医療行為での治療ではありません。神による「奇跡」と呼ぶべき出来事です。

この「奇跡」と呼ばれる出来事は、人間の求めによって起こされるものではありません。

熱心に願ったから与えられたとか、願いが叶えられなかったのは熱心さに欠けたからというわけではありません。

私たちには「奇跡」としか思えない出来事は、神の心の顕れというものです。神が欲するところ、その心が顕されます。ときに。これを人間は「奇跡」と呼ぶのでありましょう。

神が欲される・神が求めておられるところに、癒しは起こされます。

神を「求めている」からではなく、

神が「求めている」のです。

神は、時にかなって、人を癒されます。人を求めておられるからです。

「癒す」という出来事には「希望」があります。神は人を「癒す」という御業を通して、これからは希望を持っておられます。

「望みの神が、信仰からくるあらゆる喜びと平安とをあなたがたに満たし、聖霊の力によって、あなたがたを望みに溢れさせてくださいます」